七夕
はたをる
の図

1
折紙の図
ちんのかつら
のしたくち
わかざかつら
きのころ
きのころ
かぶと
ちょうろ
てんぐひ
きやら
つりがね
とみこで
ちんづこ
たま紙
きつね
ちょうちん
ちょうちん
ちょうちん

秋乃田の
わが袁の
特統天皇
袁の
わが
なるべし
ひとり

女中絹ぬひ

小そでとおこそでこんとぬのこと
おびとおひ
ようぎとおりぬ
ようたあとめしものの
えんぎとおさろし
ツやとうちゃく
うえたりとおけしてを
だふとおいろ
ぬうとおちづまる
おそろとおんなる
おくくとおむろる
ありくとおひろい
人とうぶめを
ゆくとおぐし
うえゆをそろゆる
食ろんとわぐる

山名赤人

田子ぬれ浦ようち出
ん富士の白雪
神ごの清ようの
富はふりはく

猿丸大夫

奥山ふかみちゆき
ふるもけなく鹿の
ふ鳴ぬ秋ぞ
めきたりかな

中納言家持

鵲乃ふるすをせば
ちろしにをく霜の
ちろをそうれば
秋ぞ山もみける

安倍仲麿

天原ふりさけ
みるとの月を
なるそ月を

喜撰法師

我庵ハ宇治の山
よ世をうぢ
人ハいとふ

小野小町

花乃色ハうつりに
けりなにいたづらに
わが身よにふる
ながめせしまに

うらまいと いしひ
おわしと おこゆし
一えいを ひとつ
みそを ひし
ぞみそへさだん
りちい かりん
ふんこい ちゐい
たんでい いしく
まめのこい さかと
そうめんい でろ
ゆぎりぬ ひとび
ふのやさい めさが
ひろひきい きり
とうふい かど
ちうすい おべの
ゆのこい おゆのち
りしゆい ひた
なすびい ゆを
ようがえぶい よわみ
うんやくい いしゆく

うをへ　そ
さくらの　おもる
たいい　おひ
ゑこい　ゑ
いこ　ゑ
ぎやこい　ぎや
するめい　ち
こめい　く
めし　う
さけい　ち
ちゑこゆい　ま
すしい　ち
ゑびい　ち
てんぐい　ち
こぶうい　ち
大あんい　ち
ぬくもの　ち
ちやい　ち
ちろもの　ち
香のものい　ち
ぢんぢんい　ち

輝光

ちはやのゆくも
ちからくらべ
ちからもしらぬ
わかさのりせる

蓬城貴

和田の原八十島
人ゆはうぎ
わたれけるを

備西遍照

遠方人の
ぬしぢ吹とぢて
をとめすらん
ちはやぶる

湯殿流

龍波絲のうろ
おはるみなれ川
恋ぞつりて
ふちとなりける

河原左大臣

みちのくの
しのぶもぢずり
誰ゆへに
乱んと思ふわれ

光孝天皇

君がため
春の野に出て
わかなつむ
我はころもの
雪はふりける

文のかりじやう
長さ二寸五分
きまり
ひきび文かなそ
紙付の上下
中の上
上
中
下
下
又表紙のかりじやうに
のかりこに書なんとを出
べし

中納言行平
立わかれいなばの山の峰におふる
まつとしきかばいまかへりこん

在原業平朝臣
千早ぶる神代もきかず竜田川
からくれなゐに水くくるとは

菅原道真朝臣
このたびは幣もとりあへず手向山
紅葉の錦神のまに〳〵

侍従
名にしおはゞいざこと問ん都鳥
わが思ふ人はありやなしやと

元良親王
わびぬれば今はたゝおなじ難波なる
みをつくしても逢はんとぞおもふ

素性法師
今こんと言しばかりに長月の
有明の月を待出つるかな

月のかりじやう
正月を むつはる
二月を きさらぎ
三月を やよい
四月を 卯月
五月を さつき
六月を 水無月
七月を ふみ月
八月を 葉月
九月を ながつき
十月を かんなつき
十一月を 霜月
十二月を しはす月

ふるかりじやう
正月 二月 十一月
二月 十四日 十五日 十七日
二月 十八日 十月 十六日

三月 朝日 九日 十七日 十九日
四月 十日 十二日 十八日
五月 八日 十二日 十八日 十九日
六月 六日 十日 十五日 晦日
七月 十日 十五日 晦日
八月 十日 十五日 十八日
九月 朝日 十七日 十九日
十月 十日 十二日 十八日
十一月 八日 十二日 十八日 十九日
十二月 六日 十日 十五日 晦日

ぶんやのしゅうしゅう

正月は　とりの日
二月は　さるの日
三月は　うまの日
四月は　ねの日
五月は　うの日
六月は　むまの日
七月は　とりの日
八月は　ねの日
九月は　うの日
十月は　ひつじの日
十一月は　とりの日
十二月は　うしの日

文屋康秀

吹こそあれ秋の草木のしをるれば
むべ山かぜを嵐といふらん

大江の里

月のうつるまどゐにしのこそ
わが身ひとつの秋にあらねど

菅家

ひさかたの雨のなかにも
とるあやめ　ぬるゝ
ものとのみ　ぬるゝ
弥乃きみかな

三條右大臣

名にしおはゞ
あふさかの関
人こそ
しらめ

貞信公

小倉山
ゆきかよ
みちなき
ものを

中納言兼輔

みかの原
なかれてゆく
泉川
いつみきとてか
恋しかるらん

すゑまつ
ちをとれ
などさ

○一代のまうりうん紀
とゝろうゝ
みせん岩田裏そ
いこうゝ
岩田みて感ふんゝ
年せいゝ来と申ハ大
みちよりいふとゝに
ぬい八まん
○たきゝぬとゝろうゝ
本九ゝに大三のよ
みおひゝろゝせのよ
そ入ゝまうゝ
○うけゝけとゝろうゝ
本ゝとりよのよ
さゝふ大乃孫つゝ水
はちゝゝうゝむまよ
つゝそいる

源家平親臣

山里はふゆそ
さびしさまさる
人めも草も
かれぬとおもへは

元河内守恒

人めくくるゝ
草もかれぬ
なをみまとゝせる
志ゝ蔦かれる

壬生忠岑

有明のつれなく
見しあけ
月とうらみて
くれけさ置ふ
ゆきの志ゝ宮

坂上是則

朝ぼらけ
有明の
月とうらみて
くれけさ置ふ
ゆきの志ゝ宮

男女相性の吾悪

○男木女火子ふ人あり
四三人火ふゝ
人ゝせろめきゝもの
ろゝきゝりいのちゝ
志そのたくゝめろまろ
つゝそゝ
○男木女本ちゝゝ
のちゝろゝ三人ゝ人
ゝあるゝゝゝ
まろゝて上ひんせんふ
志てゝゝめゝきゝり
○男木女土子三人あり
ゝゝゝゝ志ゝ名ゝれば
ゝにゝんゝゝつ○ふ
ゝりゝゝかゝり非ゝと
けふたゝゝてゝ
○男木女金ちゝめゝ
ゝゝのちゝ志ゝ三

喜道列樹

山川ゝ風のゝけ
きゝふ志ゝゝゝ
かゝれもゝゝぬ
りみちかるとゝり

紀貫之

人をゝのさゝん志
志ゝゝとゝるほゝゝ
花ぞひゝゝ
香ふ白ひゝ名

人のうべしことにはのどんしてくぜろ事あり
けるとそう
○男木女水子人ろ
きもふろきにしていの
ちなげ神とうよまま
けりていまくうしてん
ろくに名んあり
○男火女火大にうに
みめもどもいちくた
らどしてくぜろまを
ふうろおんをまろどし
○男火女土大にう
子三人又い九人ふつき
みしていのちかげし
ふうろおんを酒ろうて
ゆ紙くう
○男火女木うしろ三
人のしへ八人あるべし

久のうきやうい
ちのくさかうあと
いくもむくまう
ここびまるえんうぬ
むのうりたくさうへやと
くこみぢうくゆ紙しう
ちと

清原深養父

夏の夜はまだよひながら明るをくもの居るいづこよ月やどるらん

紀友則

久かたの光のどけき春の日に
しづこころなくはなの散らん

藤原興風

誰をかもしる人にせむ高砂の
まつもむかしの友なりける

文屋朝康

白露に風の吹しく秋の野
つらぬきとめぬ玉ぞちりける

右近

忘らるる身をばおもはず誓てし
人の命の惜しくもあるかな

藤原義孝

君がため惜しからざりし命さへ
長くもがなと思ひけるかな

に名んのりうぢ神をまつりてう

○男女女合大にろ
ーたぐーまを吉ろ二
人の三人あるべーいまま
くにとがーきあり但
ー人ふたりとろ五
○男女女水大ふろ色
ろあまをぐもしんあり
いちうくにとがーくた
てくぜろ事ーあるべー
○男土女木土をたろう
ちーあいまぐーけを
どものちいーろ五人
あるべーにをふ神を
酒つりてう

○男土女火大にう
ろ五人いたうくたり
ふ事もこ病のまく
ちと祇神とまるべ

○男土女土土吉かう
ちーあーうーのちいろ
ーろ三人あり行ろも
かーふにちうかーし
ちんーんありてう

○男土女水大にもし
子ろーいもこ病を
らどねをうちおとを
やうにかかーうぢ神
とまつりてう

○男金女金大ふう色
ろ二三人あるべーやまひ
事ーさんどう神とまろ
るべーのちいう

○男金女木大にう色
ろ三人あるとーも人かか
くれなるべーかのまく
ゆうぶーてくぜろ事
たんど

○男金女水大にう

平重盛

ふまとて矢ふ
出たる我恋い
ものやふと
人のとふまで

壬生忠見

恋をてふけるるい
ぬこきこ恋にるり
人ちまとこて
どいろわーが

清原元輔

ありあけのつれなくこそ
神をちんりつ
ふのまろふ
源ちこーとは

中納言敦忠

ひとくしよりの
ふふるまい
ーー掛紙
ちりはざるとろ

中納言朝忠

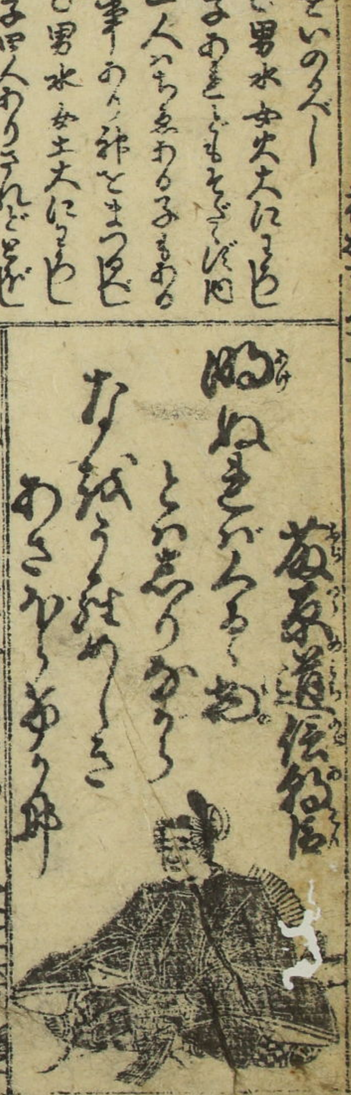
ふるのまとて
なくい中ーく
人をも身をも
うーみさーま

義孝公

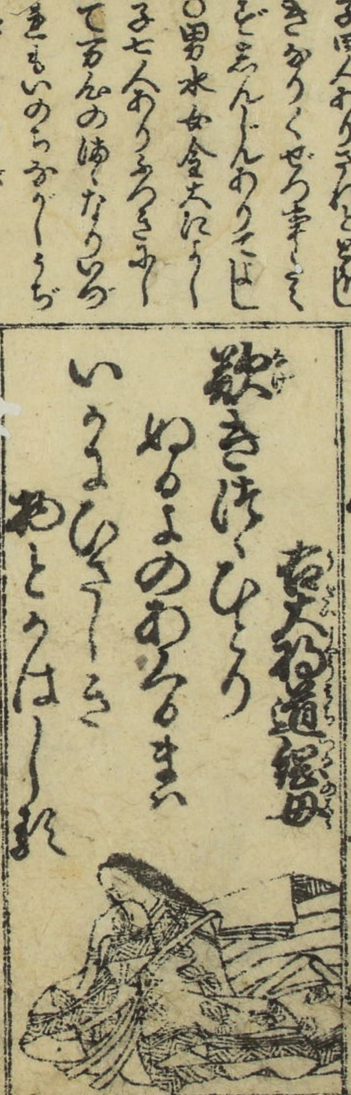
ぬーもいてふるき
人ちりやえて
身のいてこづふ
ちりぬてきうか

ぬいこの事ハ女郎一の義ゐをぶべくくぶけ
ぶりひの八ヘーーあ人宮
笑うる郭かうる浮くとも
結ぶ相ひ八れ可ゝ
ちゝーかこうぶまゝよ
ちゝ八ヘーー郭ぶくうろ
ぶ之うろ八ヘー

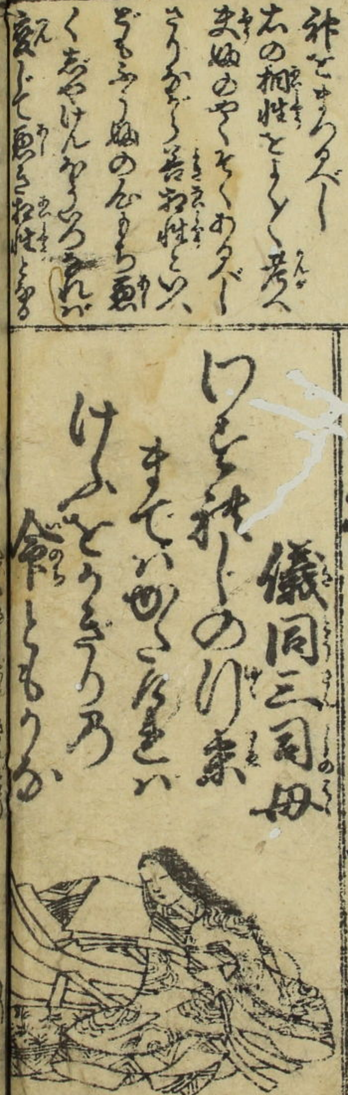
といのくべし
○男水女火大にまじる
子あるをこどもそだてべし
一人いちあるみもある
事しのく祈とまつにまじ
○男水女土大にまじる
子四人ありさんどまじ
きかうくぜろ事しく
どもんじんありそびし
○男水女金大にまじ
子七人ありろきみて
万ぐんの沸くなりろ
きもいのらかしくちぎ
祈とまろくべし
太の相性をしく学べ
夫婦のやくそくあるべ
さうかぐ若お性とい、
どもふ婦のぐもち面
くちろけんやしろ子れい
変じて面ろ相性とする



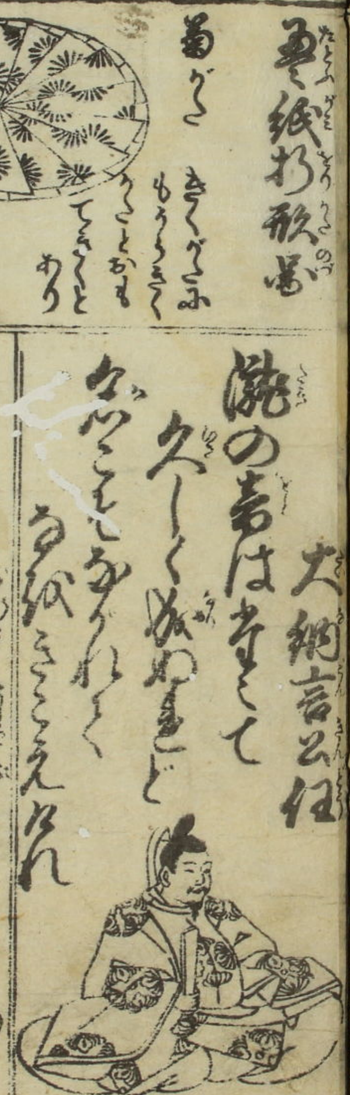
菊家道伝行居
ぬきぶくろ
とりかう
紙うすめしき
あさかぜ
あり舟



素大行道綱母
歌きけくひとり
ぬるよのあるまい
いうよひくしき
わとうはしれ



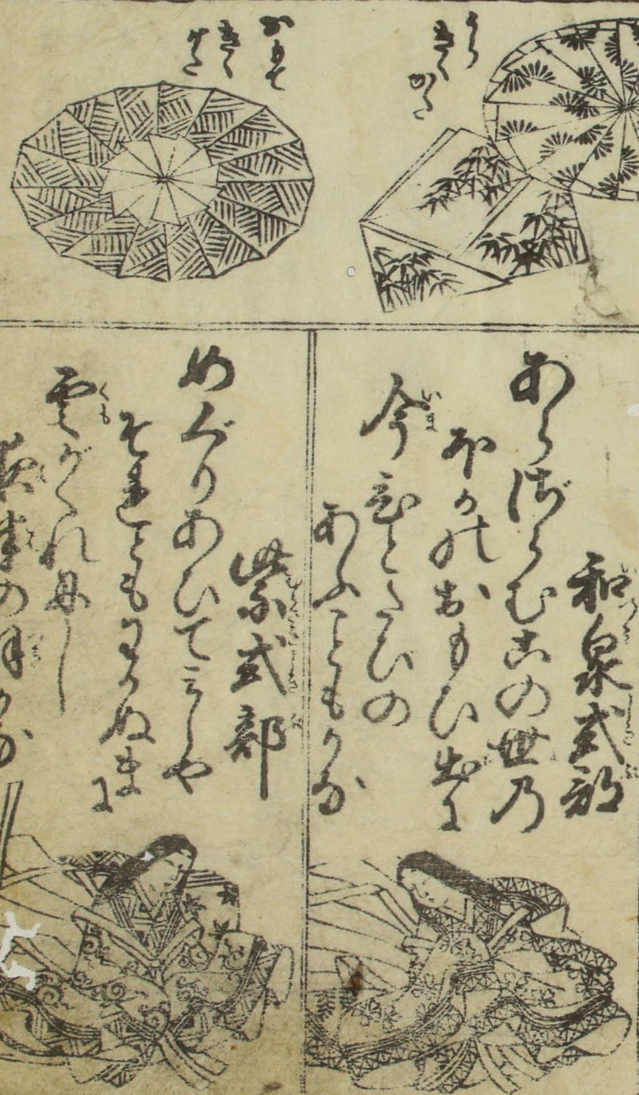
儀同三司母
ひとをわしのり来
まてい面ことをきい
けふとうぎり乃
命ともうか

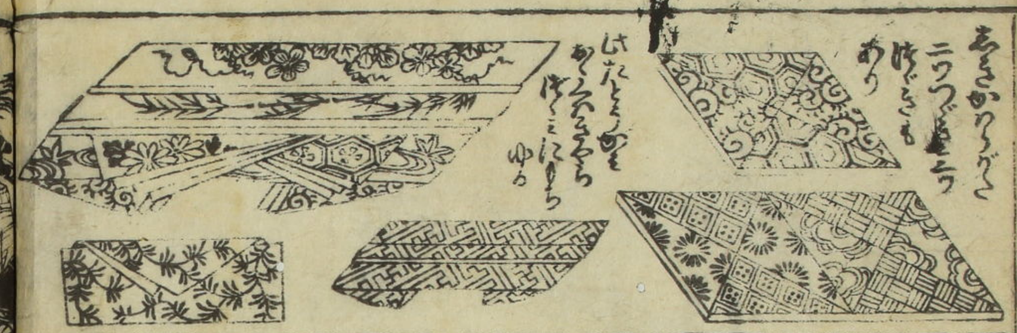


大納言公任
瀧の音は
久しくなれまと
ふりてこそ
ふりてこそ
名ぞ

和泉式部
あらざらむこの世乃
かなたのおもい出
今ぞしるこひの
あふこもうか

紫式部
めぐりあひてこうや
そまともうろぬま
あくれ月
雲まの月か





大武三位
有ふこゝろ
さてあるれ
いでくるよ風吹
ゆうよんと
ゝとやハする

藤原惟成
あををけよ
ゆくすその
月ゆみしるか

小式部内侍
大江山いくの
みちとをれば
まゝふみもみず
あまのはしだて

侯婦大輔
いあしく人の
みやこ乃ハ
ゝ乃ハ
白ひめるうか

清少納言
秋とこゝ
ろ
ふあ
ゆるさで

左京大夫道雅
今ハ
なんと
人ぼ
いふ

二重折
水ゲタは敷合せしもこれをふかめり
相撲
柳大橋正行
摂中納言定輔
川海四位
三條院
能因法師

茅染色の名
青
花色
減黄色
宋賊色
鶯茶
京色
黄
卵色
白橡色
梔子色
丁子茶
赤
緋色
薄橡染
紺染
子種色
藍黄色
薄紅色
蘆豆褐
山鼠色茶
木蘭色
鬱金色
黄茶
鶸茶
柿渋色
桐皮茶
紅染
藍染
桃色

親舅姑ゐたらんかぎりてゝことにとうとべらんぢ
ゐを好て孝めゐすべ
きなり我身のゆくと
へようくふうきんじゃう
なるべし

良遍法師
ちはやぶる
神をも
恵給へ
くすりむまじ
ものゝあはれ
秋の夕ぐれ

大納言經信
夕されば
門田の
稲葉
おとづれ
て
芦
秋風
ぞ
吹く

藤原敦忠朝臣
あふことの
たえてしなくば
なかなか
に
人を
も
身を
も
恨
まじ
物
を

藤中納言通房
高砂の
おのへの
さくら
咲
にけり
とや
まのあらし
さむかるらん

源俊頼朝臣
うかりける
人を
はつせの
山の
おのへ
の
さくら
いのちに
ぬしの
なし

藤原基俊
契
をきし
させも
が
露
を
命
に
あはれ
とぞ
思
ふ

藤色　葡萄色
弱色　紫色
薄色　桔梗色
樗色　鞠色
白　素袍
黒　鼠色
浅葱　藍鼠
弱緑　柳茶
真赤　褐色

清性寺関白藤原豊家公

秋田のつくりたるくもの
ゑをたべくらべ
るるふきまくら
あさ川しら浪

崇徳院

瀬をはやみ岩にせかるる
せゝらぎ瀬川の
われてもすえあはむと
おもふこそばし

源義昌

淀路島かよふ千鳥の
なく声に
いくよ寝ざめぬ
すまのせをもの

七夕詩哥

霧収別渡珠空落
雲色張粧紫水成
鳥鵲橋連浪性来
銀河横卷風消息
玄衣夜浪震袁湿
行燭漫流月欲消
風送暗香袁怨
露及明粧不禁
在天形作比翼鳥
在地形作連理枝
憶得少年長乞巧
竹竿頭上彩絲多
莫言天上弗相見

左兵衛督

秋風ふかなるひぐ
れのそらに海より
いでる月の
うすのさやけさ

侍従源頼川

なげらしもしも
ちぐさ思ひの
みだるるこゝろ
あれこそ思へ

後徳大寺左大臣

ながらへばまたこの
ごろやしのばれむ
憂しと見しよも
今は恋しき

猫勝人間軽別離

あまた川かぐるくるもかしくゆきのあしせよ
ひろせうぐ

ふるくとやなかいそぐ
らせ天の川まちつろ
ゆるりふれ永出り
孫ゆろ秋乃あくるつ
さ七夕のあしせい天ぬ
ぬるさあるくも
天の川さよひあしせろ
ゆく秋とよろゆよみ
てかぬちるらん
夕はるゆふゆをてもろハ
めまかぐさのおるさく
ワるるをのこ秋もハ
いりあまさ滅まさくん
天のゆけさーもう金

遊因法師

男ひるもむさそも
食ハ有りの紙
うきあまさぬい
ゆくさかりるを

世乃やーみらをを
ゆるをどひいる
どのおくふも
藤をうくなる

藤原信綱朝臣

なるくくべまくこば
ごろや思ひをて
うしとみーせぞ
今ハあくいき

濃のなるろふ
おるをひろのまれおるか
でもみるをざかさるが
ゆをゆるくちハたどにく
をふすしちくべも秋ま
あ人をれかゆく秋の
糸折のこ
濃くくぬちるりちをを
て天の川あくせふるを
をゆくてきのこ
七夕のあくひをたのむ
うげかをやゆくべの月
ろつまむくぶ
ゆをくくをぬりるくを
おの月れあをあるり
あひくる星合夫を
秋も牧天の河ふて五波
けるをみるを星合の夜

僧恵法師

夜ものをゆく物ろく
ころハ的やーで
秋夜のひまさく
つををるるをけり

西行法師

なげくとて月やハ
ものの紙にはする
かこちるかなる
涙かをくるる

寂蓮法師

ひるさあのすもも
まるこ花抜む紫を
雲ををちのるる
秋ろゆくられ

又姓名と六十の号

金	きのえね	うし	ひつじ
	きのとうし	とら	さる
火	ひのえとら	う	とり
	ひのとう	いぬ	とり
木	つちのえう	え	い
	つちのとい	ひつじ	ね
土	かのえね	ひつじ	うし
	かのとうし	とら	とり
金	こうのえとら	う	とり
	こうのとう	いぬ	とり
火	さのえいぬ	え	ろ
	さのとい	ひつじ	ね
水	ひのえね	うし	とら
	ひのとうし	とら	さる
土	つちのえとら	う	とり
	つちのとう	いぬ	とり
金	かのえいぬ	え	ひつじ
	かのとえ	ひつじ	ね
木	こうのえひつじ	ど	うし
	こうのとど	とら	
水	きのえとら	う	とり
	きのとう	いぬ	とり
火	ひのえいぬ	え	ろ
	ひのとい	ひつじ	ね
土	つちのえね	うし	とら
	つちのとうし	とら	さる
木	かのえとら	う	とり
	かのとう	いぬ	とり
水	こうのえいぬ	え	い
	こうのとえ	ひつじ	ね

又姓名とこれまでの上の姓とをもまで用ひて是まで云ひのねの所のいくさびもりとひ殺をうぞる

女ハつとめ
稽こそ
ぞつこそ
ふうまつの
ハまにこそ
まつべつ
のりこそ
ろくはこ
ろくはこ
ろくはこ

殘の小判相場

殘壹貫文　拾匁の　九百八文
　　壹文　八拾七文
　　壹ト　八文七ふ

殘壹貫文　拾壹匁の　八百六拾七文
　　拾匁　八拾三文六ふ
　　壹文　八文三ふ五ム
　　壹ト

殘壹貫文　拾貳匁の　八百二拾二文
　　拾匁　八拾文
　　壹文
　　壹ト　八文

殘壹貫文　拾貳匁五ト　八百文
　　拾匁　七拾六文八ふ
　　壹文
　　壹ト　七文六ふ

殘壹貫文　拾三匁の　七百六拾三文八ふ
　　拾匁　七拾三文八ふ
　　壹文
　　壹ト　七文三ふ

殘壹貫文　拾三匁五ト　七百三拾八文
　　拾匁　七拾壹文
　　壹文
　　壹ト　七文

殘壹貫文　拾四匁の　七百拾三文七ふ
　　拾匁　六十八文四ム
　　壹文
　　壹ト　六文八ふ

殘壹貫文　拾四匁五ト　六百八十二文
　　拾匁　六十六文二ふ
　　壹文
　　壹ト　六文六ふ

殘壹貫文　拾五匁の　六百六十四文
　　拾匁　六拾四文
　　壹文
　　壹ト　六文四ふ

殘壹貫文　拾五匁五ト　六百四十八文
　　拾匁　六十二文
　　壹文
　　壹ト　六文二ふ

殘壹貫文　拾六匁の　六百二十四文
　　拾匁　六十文
　　壹文
　　壹ト　六文

奈良法師

みよしのの山の秋
ゆふされば
ころもうつなり
衣うつなり

藤原清正朝臣

打わたす
民ゆたかに
豊かなる
ちからぞあれそ
すさのをの

道綱母

花さそふ
あらしの
庭の
雪ならで
ふりゆくものは
わが身なりけり

権中納言定家

来ぬ人を
まつほの
浦の
夕なぎに
やきもしほの
身もこがれつつ

正三位家隆

風そよぐ
ならの小川の
夕ぐれは
みそぎぞ夏の
しるしなりける

後鳥羽院

人もをしし
人もうらめしあぢけなく
世をそむくにまさる
物は
なし

十二月 異名

大小月

正月 睦月　子日月　初春
二月 如月　梅月　震月
三月 弥生　花月　未月
四月 卯月　若葉月　麦秋月
五月 皐月　橘月　菖蒲月
六月 水無月　常夜月　風月
七月 文月　七夕月　秋月
八月 葉月　中秋月　月月
九月 菊月　長月　紅葉月
十月 神無月　時雨月　小春
十月 霜月　霜月　神楽月
十二月 師走　除月　除月

正月 三月 五月 七月 九月 十月 十一月 十二月 三十日
二月 四月 六月 八月 十月 十二月 二十九日

正月 十日 十五日 二十日 二十五日 三月 十日 十五日 二十日 二十五日 四月 十日 十五日 二十日 二十五日 五月 十日 十五日 二十日 二十五日 六月 十日 十五日 二十日 二十五日 七月 十日 十五日 二十日 二十五日 八月 十日 十五日 二十日 二十五日 九月 十日 十五日 二十日 二十五日 十月 十日 十五日 二十日 二十五日 十一月 十日 十五日 二十日 二十五日 十二月 十日 十五日 二十日 二十五日

天明七丁未年中秋

京都書林　御幸町通姉小路上ル町　菱屋孫兵衛